

一人と爲したるもの、文學と禮法あるは、曹大家の流亞なり。其の志の清高なるは、老萊、陳定、王霸の妻と、差々上下するに堪へたり。其の大年にして百二十五歳を享けしは、則ち古今未だ此れ有るを聞かずして、貞と壽との獨絶を推さざるを得ず。二子、皆賢にして芳を奕世に流せり。天の厚きこと、此に至るを得るか。「婦の莊氏は、賢徳ありて禮を以て自ら閑り、身を殺して信を明にせり。當日にありて、良人と偕に即ち穴に入らば別なきを畏れず。遺爾として軀を捐つるは、賢智の過ぐるゆゑと爲すに似たれども、三日の後に之を見れば、則ち後なるも先なるも、均しく一死に屬せり。莊氏の智は、及ぶ可からずとなす。是の姑と是の婦と、禮宗と爲す可し。誰か巾幗場の中に、遂に蓋世の豪傑無しと謂はんや。



夏月涼

水野忠敬

ところせき庭も涼しく見ゆるまで

梢はなる、夏の夜の月

諏訪忠元

たへかねしひるの暑さも忘れぐさ

宿れる月の影の涼しさ

矢田猪平

人々のあつしくといふ聲も

たえて涼しき夏の夜の月

相澤求

涼しさはいつれはあれと川そひの

月すむ宿のはしひなりけり

増山三雪子

しけりあふ木の間の月の涼しさに

秋かとはばかりあやしまれけり

月下のピアノ

東くめ子

ぼらの香たかき 花そのゝ

わか葉のこかげ さまよへば

つきにうかれて かなづらん

ベーターフェンの ムンライト

そなたのまどに きこゆなり

ひと本野菊

つねを

千代の光りも おほ方に

知られぬ野菊 ひと本は

かわるに早さ 夕暮の

雨に怨みの 色みせて

さびしき野邊を いたはらぬ

よをあき風の つれなくて

かゝりし露も なにとなく

ひとりわはれの 物かもひ

瀧

瀧子

瀧といへば我日の本にては、那智の瀧、布引の瀧、

裏見の瀧、霧降の瀧などぞ大なる。されども、これ

らはおのれ見しことなれば、くはしきさまは得

知らず、只めでたき山水にてながめもすぐれたる

ことなど、ものゝふみにて知れるのみ。

小さけれども、おのれのいとも親しきは紀伊國海

草郡の山にある鳴瀧なり。この山の麓には一の小

さき寺あり。寺の後を通りて山道をわくれば、道

の左右には楓樹いと多く茂れり。瀧は高からねど